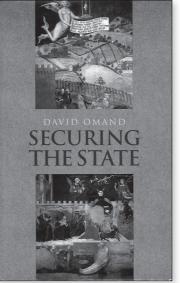
a book café 書評〈洋書〉

インテリジェンスの哲学 普政のアレゴリー、あるいは 『 東京大学先端科学技術研究センター准教授**池内恵**



David Omand, Securing the State, London, Hurst & Company, 2010.

諜報を担う情報局秘密情報部(SI局保安部(SS、通称MI5)、対外のための情報収集・防課を扱う情報、課報)力だろう。国内治安維持、英国の重要な外交資源は、その情英国の重要な外交資源は、その情

が集める情報は、米国との「特別な中心とした「情報コミュニティー」を担う政府通信本部(GCHQ)をのいとした「情報コミュニティー」をがある。通称MI6)、そして通信傍受や

れている。関係」を維持する重要なカードとさ

昨年2009年、MI5とMI6 は設置百周年を迎えた。これに合わ は設置百周年を迎えた。これに合わ せて、内部資料の閲覧を許される「公 せて、内部資料の閲覧を許される「公 せて、内部資料の閲覧を許される「公 書が刊行されている。MI5につい ては、Christopher Andrew, Defence of the Realm, Allen Lane 2009 が、M I6については、Keith Jeffrey, MI6: The History of the Secret Intelligence Service 1909-1949, Bloomsbury Publishing, 2010 である。GCHQ についても同様に、Richard Aldrich,

GCHQ: The Uncensored Story of ている。

Agency, Harper Press, 2010 が刊行 Britain's Most Secret Intelligence

された。

は、単に百周年を記念するだけでは ようとする意図がうかがわれる。 民社会からの理解と支持を取り付け なく、情報公開を進めることで、市 これらの公定史書の刊行の背景に

年9月の「ガセネタ・ファイル に配備できる」と誇張した2002 の信頼性を損なった。冷戦終結後20 (dodgy dossier)」は、英国情報機関 「イラクは大量破壊兵器を45分以内

役割、存立根拠に問い直しが迫られ 年が経ようとする現在、情報機関の 年、9・11同時多発テロ事件から10 は「中央情報機構改革案」を発表し ている。 2009年10月、 英国政府

インテリジェンスの哲学

担った高級官僚が、新たな環境下で 報コミュニティーの再定義と再編を 本書『国家を守る』は、英国 の情

といえよう。 著者のデービッド・オマンドはケ

「インテリジェンスの哲学」の体系化

の組織・理念を構築する試みである。

ティ・カレッジ卒業後、GCHQ入 ンブリッジ大学コーパス・クリス

りし、いわゆる high-flyer のキャリ 内閣府

Cabinet Office: 日本の内閣危機管理 and Intelligence Coordinator in the 安全保障・情報問題調整官 (Security 2002年から2005年には内閣 事務次官や内務省事務次官を歴任し、 アを歩んだ。GCHQ長官、

籠絡する。

る合同情報会議 て、イギリスの諸情報機関を監督す 監に相当) の要職にあった。 (JIC)委員・議 並行し

画化されているが、BBC制作の連 長も務めた。 この経歴から連想されるのは、 戱

職) 演じる内閣府行政局次官(架空の官 の中で、ナイジェル・ホーソーンが 続コメディー「Yes, Prime Minister」 アップルビー卿だろう。大ヒッ

SEすら出ていない」政治家を幻惑 み入った概念と表現を駆使して「L いかなる時も保ち、難解で過剰に込 ビー卿は寸分隙のない慇懃な物腰を トしたこのコメディーで、アップル

ないわけではない。何しろ14世紀シ 本書の著者にも若干そのきらいが

Pubblico) ズムを詳細に解読することから、 フレスコ壁画に込められたシンボリ ロージョ・ロレンツェッティによる 「平和の間」の、アンブ 本

書を始めるのである。

には、 描かれたのが「善政の寓意」である。 この二つの間 る。 施された都市と田園の風景が描かれ 政の効果」が位置し、 殿「平和の間」に3幅からなるフレ スコ画を描いた。 ロレンツェッティはプッブリコ宮 終末的な悪政が描かれている。 かい合 0 った壁の「悪政の寓意」 一面の壁には「善 光の差し込む壁に 理想的統治の

が善政をもたらすのか、 ギリシャ・ロー そこでは徳性の諸観念を擬人化した て示されてい オマンドはまず、「善政の効果」で る。 マの神々が描かれ、何 寓意によっ

> まず、市民に「安全」を提供するこ 理想的な都市と田園の上空に描かれ とだという。このセキュリタスは「正 ス」に注目する。善政とは何よりも た「安全」を体現した「セキュリタ

生活を営めるようにする」という目 る「人々が自由に、 国政府が21世紀の対テロ戦略で掲げ とが約されている。 者が安全に、恐れなく暮らせる」こ 義の実現」の標章を帯び、その手で ひもといて掲げる巻物には、「全ての これはまさに英 安心して通常 0

て描かれている。絵の中心には、「共 諸徳性を擬人化した神々の集会とし 安全と安心をもたらす理想政体が 通善」を象徴する神々しい存在が鎮 そして「善政の寓意」では、この 標と同様であるという。

座する。その周囲を囲む諸徳性の相

義

して現代の民主主義国家で求められ 互関係こそが、 14世紀シエナで、 そ

決を下すが、「コンコルディア スティシア(正義)」が厳正な秤で判 て付き添っている。また、峻厳な「 和」には、「フォルティチュディオ が安楽に横たわる。しかしその というのが著者の主張である。 る、あるべき政治社会の秩序である (勇敢さ・回復力)」が棍棒と盾を持 「善政の寓意」では「平和」の象徴 ユ

と著者は読み解いていく。 とへの信頼抜きには成り立たな は、まずもって正義が実現されるこ て配置されている。 市民社会の調和 和)」はこのユスティシアに結び付け

はどこにあるのか。「共通善」や「正 それではインテリジェンスの場所 の上に舞う一サピエンチア

る。 性を予測するのみであり、 るという。フレスコ画上のサピエン 善の実現と、 起する。 われていることにも著者は注意を喚 チアが、プルデンチア ンチアがもたらす正しい理解こそが 恵)」の姿に著者は注目する。サピエ 情報機関は安全への脅威の蓋然 賢慮は人知の限界を警告す 正義の確立を支えてい (賢慮) に伴 確実性を

活を継続するに足るほどに、危険は 付けていく。現代社会の「セキュリ 寓意」に込められた寓意から、 タス」とは何か。それは 国家・社会とのあるべき関係を根拠 の情報コミュニティーのあるべき姿 本書はロレンツェッティ「善政の 「通常の生 現代

> 期することが一層求められ、 構と協力・連携して脅威の 持つ範囲は広がり、 幅広 い政府諸 出現を予 いざ脅 機

力・復元力の向上が目指される、 威が現実化してしまった際の回復 いうのが著者の現状認識である。 同様に、必要な「サピエンチア」、 ح

どのようにして得られるのか。その すなわち真に価値ある情報とは何か。 限界は。 フォルティチュディオ」の抑止力と いかなる手段をもってして

もたらすことはできない、

ځ

論を組み立てていく。 回復力を確保するのか、 と著者は議

す倫理的

問題についても解き明かし

著者が新時代のインテリジェンス

そも善政とは市民の調和が成り立っ 情報活動を有効に行うための前提条 た状態をいうのであり、それこそが つまり市民社会の調和である。そも の鍵とするのは、「コンコルディア」、

低いと人々が確信できる状態」であ

るという。冷戦後、

情報機関の受け

民の信頼と支援を取り付けることを 公開性を確保することによって、市 件でもある。そのため一定の透明性

検討する。 どのようにして失敗が生じ得るの 分析と政策の間に存する乖離から、 る制度設計を論じ、 情報分析を適切に政策へと結び付 して、情報収集のサイクルを解説 著者は重視する。 以上のような哲学的考察を基礎に 情報機関の活動が引き起 不可避的に情 報 ij か

いけうちさとし)